

問題としての神

経験・存在・神

稲垣良典 著



長崎純心レクチャーズ

第4回

創文社刊

問題としての神

経験・存在・神

稲垣良典 著



創文社刊

稲垣 良典 (いながき・りょうすけ)

昭和3年佐賀生まれ。昭和26年東京大学文学部哲学
科卒業。九州大学文学部教授を経て、現在、長崎純心
大学大学院教授。

〔著訳書〕『トマス・アキナス哲学の研究』『習慣の
哲学』『恵みの時』『抽象と直観』『神学的言語の研究』、
トマス・アキナス『神学大全』第11～16, 18～20,
23分冊(以上、創文社), 『トマス・アキナス』『天
使論序説』(以上、講談社), 『トマス・アキナス倫
理学の研究』(九州大学出版会)。

問題としての神

ISBN4-423-30112-1

2002年3月5日 第1刷印刷

2002年3月10日 第1刷発行

著 者 稲 垣 良 典

発行者 久 保 井 浩 俊

印刷者 三 甲 野 隆 優

発行所 〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-7
電話03(3263)7101 振替00120-0-92472
<http://www.sobunsha.co.jp>

創 文 社

~~~~~

著者との申し合せにより検印省略

Printed in Japan

暁印刷・鈴木製本

## 「長崎純心レクチャーズ」について

長崎純心大学学長 片岡 千鶴子

一九九四年、長崎純心大学がカトリック大学として第一歩をふみ出したとき、キリスト教と日本文化との出会いの象徴ともいえる長崎に設立されたカトリック大学に相応しい活動をめざして、いくつかの将来計画が構想されました。その一つが本学のキリスト教文化研究所によって企画・運営される「長崎純心レクチャーズ」であります。

大学は本来的に真理探求の場でありますが、カトリック大学は信仰をもって受け入れた第一の真理の導きの下に、それぞれの学問分野において真理を探求し、それを惜しみなくわかちあうことをめざします。したがって、カトリック大学の特徴は、教育と研究、その他すべての活動において何よりも信仰と理性の総合を追求するところに見出されます。「長崎純心レクチャーズ」は本学のこのようなカトリック大学としてのアイデンティティーの確立に寄与することをめざしています。

このような目的にてらして、講師にはカトリック信仰に導かれ、支えられつつ、創造的で卓越した学問的活動に従事しておられるカトリック学者を招き、或る期間長崎に滞在していただいて大学

共同体および地域の人々との交わりを深めつつ、それぞれの研究分野に関わりのある主題について一連の講演をしていただくことを原則にしております。こうしたカトリック学者による学問的に卓越した内容の講演は、信仰と理性とは相互に無縁であるか、あるいは本質的に敵対的であるとする近代思想の根柢なき偏見にたいして、信仰と理性はたんに両立しうるにとどまらず、真の信仰は理性の営為を扶助して、それを強化し、完成するという積極的な影響を与えうるものであることの力強い証しとなることが期待されます。

「長崎純心レクチャーズ」は、信仰と理性との対話、キリスト教信仰と人間文化との豊かな出会いを実現することを使命とするカトリック大学としての長崎純心大学が、広く世界に向けて発信するメッセージであります。長崎は鎖国時代を通じて世界にたいして開かれていた唯一の扉として、日本の「近代化」において重要な役割を果たしました。いまわれわれは、一方においてこれまでの「近代化」の歩みを徹底的にふりかえりつつ、他方ではまもなく始まる第三の千年紀における新しい人間文化の建設に向けて、本学が建学の理念として掲げるキリスト教的ヒューマニズムの立場から大胆な提言を行う責務があります。われわれが「長崎純心レクチャーズ」をわが国においてだけでなく、世界的にも高く評価され、将来の学問、思想、文化にたいして何らかのインパクトを持ちうるようなレクチャー・シリーズに育ててゆきたいと願っておりますのは、こうしたカトリック大学としての責務を果たすためであります。

## まえがき

本書は第四回「長崎純心レクチャーズ」として平成十二年十月三十日から十一月一日までの三日間、長崎純心大学で行った連続講演の記録、および講演のために準備した覚え書きを資料として収めている。その年の春、講師を担当するように学内の関係者から懇請されたとき、非力で不適格なことを承知の上であえて引受けることにした。その理由は、年来心にかかりながら果たせなかった、私のこれまでの哲学的探求をまとめるための好機に恵まれた、と感じたからである。私が九州大学で二十年間連続して行った「経験論哲学の研究」と題する特殊講義のなかで考えたことの一端は、退官記念論文集に寄稿した「経験と神」（『中世における知と超越』創文社、一九九二年）、および「キリスト教と西洋」（『地球化時代のキリスト教』春秋社、一九九八年）において公けにしたが、まだその大半は草稿のままにとどまっている。本書は右の二つの論考の続編ないし補足としての位置をしめる。

付録の資料は講演に先立って、その覚え書きとして書き下したものであるが、実際の講演ではそ

こかしこと省略したり、敷衍して述べることが多く、内容にかなりの差異が生じた。講演の雰囲気  
を損うことなく覚え書きの内容を必要に応じて取り入れる、という仕方ですべてを書き改めることが  
最善ではないかと考え、その実現のための方法を種々検討したが、最終的に両者を並列させて、ど  
のような読み方をするかは読者に委ねよう、というより実際的な結論に行きついた。資料はあくま  
で覚え書きであって、論文として読むに堪えるところまで仕上げられてはいず、注も思いつき程度  
のものにとどまっている。読者のなかには講演記録だけで十分と感じられる人も、逆に覚え書きの  
方が議論としては整合的で興味がもてるという印象を持たれる人もあるかもしれない。適当に選択  
して読んでいただければ幸いである。

私自身その創設に関わり、卓越したレクチャー・シリーズとして発展を続けることを願っている  
長崎純心レクチャーズの講師に任命されたことは大きな名誉であった。長崎純心大学の片岡千鶴子  
学長、および塩崎弘明人文学部長に心から御礼申し上げる。また講演会の準備、運営にあたって協  
力して下さった教職員の方々にもこの機会をかりて深い感謝の気持をあらわしたい。

問題としての神

目次



「長崎純心レクチャーズ」について

片岡千鶴子

まえがき

## 第一日 経験と神

はじめに——神は「問題」となりうるか

哲学と神

現代思想と神

「反哲学」

「少数派」の見解？

「経験」と「存在」

神を問題とすることへの異論

「神について考える暇はない」

スコラ学的「討論」

異論

「反対異論」

「神の死」

20 20 14 11 11 10 9 8 6 5 4 4

vii v

「神の死」は自明のことであるか

哲学と神学の分離？

「神の死」をひきおこしたものの

近代は人間を解放したのか？

「経験」の意味

「存在」の意味

経験と「経験主義」

経験の「経験的」理解

「開かれた」経験

質疑応答

## 第二日 神と存在

「存在」の捉えにくさ

経験は神の探求を排除しない

神の探求と存在論

「否定神学」

21 23 24 26 27 28 30 32 34 36 50 51 52 54

|                    |    |
|--------------------|----|
| 「神秘主義」             | 55 |
| 「不可知」と「測り尽くしえない」   | 56 |
| 「人間中心主義」           | 57 |
| 「存在」をめぐる通念的理解      | 58 |
| 「存在忘却」             | 60 |
| 「存在」にたいする問い        | 61 |
| 「存在」への問いと「人間的」思考   | 63 |
| 「西洋的」思考？           | 65 |
| 人間の認識における「神的」要素    | 66 |
| 神的創造の視点            | 67 |
| 形而上学と偶像礼拝          | 69 |
| 「存在の類比」の問題         | 72 |
| 「存在」と「愛」——ベルソナの存在論 | 74 |
| 質疑応答               | 77 |

### 第三日 理性と信仰

はじめに——理性と信仰の問題

自由——真理——信仰

「哲学者の神」

パスカルと「哲学者の神」

デカルトと「哲学者の神」

パスカルにおける理性と信仰

理性と信仰——総合の試みとその破綻

トマスにおける理性と信仰の総合

「学」としての神学の問題

「存在」の神と「愛」の神

『神学大全』の構造

近代における理性と信仰との分離

回勅「信仰と理性」

神を「問題」にすることは可能か

119 115 113 109 107 104 102 101 99 97 96 95 93 92

神を「問題」にすることは人間にとってふさわしいことか  
「神のかたどり」としての人間

質疑応答

資料

第一日

第二日

第三日

注

あとがき

197 187 169 153 135

123 122 121

# 問題としての神

—— 経験・存在・神 ——



第一日 經驗と神



はじめに——神は「問題」となりうるか

表題をご覧になって、いったいどういう話をするつもりなのか見当が付きにくいという方が多いかもしれません。「問題としての神」という表題が掲げられておりますけれども、神が問題だ、というのはどういう意味か。問題といえは実践的に解決すべき問題、理論的に探求すべき問題、それについていろいろと考えめぐらすべき問題とか、いろんな問題があると思いますが、とにかく私たちはいろんな問題を抱えている。いろんな問題に対して、それを探求していくというか、はつきりさせたいと考えているわけですが、「問題としての神」という表題は、そういう様々の問題の中で、神こそは一番大きな問題だ、非常に緊急な問題だ、という考え方をあらわしています。これこそが問題だ、といえるようなものとして私たちは神について考える必要があるんじゃないか、そういうことを言いたいわけなんです。

## 哲学と神

しかし、それをどういう観点からお話するか、あるいは問題にしていくかということが、さしあたってはつきりさせなければいけないことだと思ふんです。皆さんのお手元に教授会の資料として配られた、どういうことを今度やるのかという説明の資料「平成一二年第四回長崎純心レクチャーズ、その概要」があると思いますけれども、それをちょっと見ていただけると私がこ